

私は「アジアの中の日本文化」プログラムで、世界各国から集まった学生たちに日本文学を教えている。授業では原文ではなく翻訳を読み、議論する。学生の中には日本人もいると話すと、「日本文学なのに英語なのですか」と驚かれることがある。たしかに、少し不思議に聞こえるかもしれない。

でも、その疑問から考え始めると、翻訳そのものが面白い問いになってくる。翻訳とは、一つの言語を別の言語に置き換える作業だと思われがちだ。しかし、言語にはそれぞれ異なる仕組みがあるため、一語一語をそのまま置き換えることはできない。翻訳では、その都度、何を残し、何を言い換え、何を補うのかを考えながら言葉を選んでいく。だからこそ、翻訳されることで失われるものもあれば、別の言語だからこそ見えてくるものもあるのかもしれない。

こうした問いを考えるとときによく出てくるのが、「世界文学」という言葉である。世界中の名作を集めたもの、というイメージを持つ人も多いかもしれない。しかし、日本文学が世界で読まれるためには、ほとんどの場合、翻訳が欠かせない。そう考えると、「世界文学」とは作品のクオリティを表す言葉というよりも、翻訳を通して世界で読まれるようになった文学を指す言葉なのかもしれない。

翻訳されると、何が別の言語へ渡り、何が渡らないのだろう。その答えは一つではない。だからこそ、翻訳を入り口に文学を読んでみると、普段とは少し違う景色が見えてくるかもしれない。

岩田クリスティーナ 教授



言葉が変われば、世界の見え方も変わる。
生成 AI を用いて作成したイメージ。

普段「何を勉強しているの？」と聞かれると少し困ってしまいます。なぜなら、「映像学」と答えると、ほぼ 100%で「映画を作っているの？」という言葉が返ってくるからです。実は、名古屋大学の「映像学」は映像制作を学ぶ場ではなく、映像を取り巻くあらゆる要素を理論的に考える場なのです。

私自身、他分野の方に向けて自身の研究を説明する機会が増える中で、「映像学」が未だに聞き馴染みが無いことを実感します。ただ、近年私たちを取り巻く環境は急速に変化し、映画館やテレビに限らず、PC やスマホ、電車内のモニターなど日常に映像が溢れています。映像は時代を映し出すだけでなく、様々な問題や社会との関係性を問い直すためのメディアであり、今後ますます重要性を帯びていくのではないのでしょうか。

そんな中で私は「日本映画の予告編」の研究に勤しんでいます。初期映画の頃から活躍している予告編ですが、まだあまり知られていないことが多いのです。しかし、その流通に着目すると他メディアとの連関関係があったり、各映画会社の製作方針やジャンル、また社会情勢などの影響を受けていたり、映画を宣伝する映像という枠に留められないユニークな特徴が予告編にはあることが分かってきました。

映画（映像）というと「エンタメ」のイメージが強く、学問と結び付けられづらいかもしれませんが、ただ、日頃楽しんでいる映像の表現に込められた意味や多くの人に親しまれる理由などを学術的な視点から考える過程は、私にとって映像というメディアやそれに関わる事象が自身の生きている世界とも密接に関わっていることを実感する瞬間であり、それを証明することが日々研究に取り組む意義と原動力になっているように思います。

北嶋玲子 博士後期課程 3 年



研究調査のため訪問した、
東映太秦映画村内の「映画文化館」（現在は閉館）。

あなたは、初対面の相手が「大学で哲学を専攻しています。」と自己紹介したらどんな反応をしますか？「変人っぽい」「今までの人生で何かあったのかな？」という印象を抱く人も多いのではないのでしょうか。確かに哲学って、抽象的な問いを難しい用語でより難しくしちゃってる、みたいなイメージありますよね。しかし、哲学的問いを探究することが、そんなに珍妙なことなのでしょうか？

例えば皆さん、幸せになりたいですよ？じゃあ、皆さんにとって幸せとは何か、ぱっと答えられますか？「何って言われると…」と少しでも考えてくれたあなた、立派に哲学しています。いつもなら「どうせ考えたって答えなんか出ないよ。」と放り出してしまうような問いに真剣に向き合い、自分の人生を少しでも生きやすくする糧を得るのが哲学の醍醐味です。

私にとっての幸せとは、「快い気持ちになること」であり、それが人生の目的です。ありきたりでしょうか？しかし哲学者の中には、善そのものが最も大事だとか、持てる力を発揮することが人生の目的だとか主張する人々もいて、それぞれが説得力ある理論を展開しています。哲学を学ぶ前と後とでは、あなたの考えは 180° 変わってしまうかも？いずれにしても、善悪や世界に対する理解を深めることを通して、自分を律したり肯定してあげられたりと、人生の選択を後悔なく乗りこなすことができるようになることが、哲学の一番の魅力かもしれません。

哲学をすることとは、自分を労わることです。そのプロセスの中では自分自身を突き放して考えることも必要になってきますが、生きる指針を固めることは、自分も含めた大切なものや人を護ることにつながります。やっぱり変だけど、でも面白そう。そう思ってくれたあなた、哲学研究室でお待ちしています。

杉野文音 学部 4 年

功利主義

J. S. ミル 著

関口正司 訳



最大多数の最大幸福をめざす功利主義は、目先の快楽追求に満足しないソクラテスの有徳な生き方と両立する。人間生活全般

の根本原理として、個人や社会が正義とともに個性や人間愛を尊重するよう後押しする功利主義のあり方を追究した J. S. ミルの円熟期の著作(初版 1863 年)。「論理学体系」の関連部分も併せて収録。



白116-11
岩波文庫

私の幸せの定義に惹かれる方がいれば、ぜひ功利主義について調べてみてください！(図：J. S. ミル (2021) 関口正司 訳『功利主義』岩波文庫の書影)



月刊 名大文学部

第 153 号

隔月刊行



編集発行：
名古屋大学文学部広報体制委員会
koho@hum.nagoya-u.ac.jp
寄稿者の所属と学年は寄稿時点のものです。
2026 年 9 月 10 日発行